菊池さんにとって啓光学園中学から高校までの6年間は、「10代ながらも、やりたいことはやらせてもらった」少年時代でした。「中学ではアイスホッケー、高校では釣りのサークルで活動したんです。どちらも正式なクラブではなかったけれど、一緒にやってくれる先生がいたから実現しました。週末はみんなであちこちに出掛けて楽しかったですね」

学業面もしっかりサポートを受け、上智大文学部ドイツ文学科へ進学。国際色豊かなキャンパスで学んでいるチャンスを生かそうと、休学して1年間の留学にチャレンジしました。異文化体験によって得るものは多く、古くからの伝統を重んじて実直に行動するドイツ人の姿に、日本人と共通する魂を感じたり、志の高い他国からの留学生や現地学生から刺激を受け、実り多い海外生活だったと話します。

卒業後は近畿日本ツーリストへ。入社当初は海外旅行専門の部署で、大学や高校が実施する海外研修の手配を担当していました。啓光学園高校のホームステイを担当した経験もあります。「愛着ある母校に懐かしさ半分、仕事半分で営業に行きましたが、無事成約となり、母校の教育の一端を担えたのはうれしかったです。当時は海外研修を教育に取り入れる高校がまだ少なかったので、先進的な取り組みをする開けた学園になってほしいという思いでお手伝いしました」

現在は関西イベント･コンベンション支店に勤務。企業や大学が主催する学術会議や講演会を滞りなく行えるよう、手配に尽力しています。毎週のように国内各地へ出張し、会場で来場者を迎えるのが菊池さんの仕事。直接のクライアントは主催者である企業、大学ですが、来場されてお客さまとなる人たちに気持ち良く過ごしてもらえるよう気配りしなくてはいけません。細やかなサービス精神が求められる業務です。

「体力もいるけれど、旅行業は人と接しながら、広いフィールドにかかわる仕事。エンドユーザーの反応に直接触れられることがやりがいです」。その一例が前部署で担当した、大阪の小中学生バンドのオーストラリア演奏旅行です。120人ほどの子どもたちに同行したのですが、英語も話せず緊張していた子どもたちが、3日～4日のホームステイですっかりホストファミリーと仲良くなり、泣いて別れを惜しんでいる姿を見た時は胸が熱くなったと言います。自分が努力して作り上げた旅行が、参加する人々にとって意義あるものとなることがうれしく、この仕事を選んで良かったと実感するそうです。

「振り返ってみれば啓光学園には、狭いところでとどまらずに飛び出し、いろいろなものを受け入れようというマインドを育ててくれる環境があったと思います」と、自分の原点を語る菊池さん。印象に残るのは、深夜に出発して奈良から学校まで40km以上歩き続ける耐寒徒歩や、白馬の雪山登山、若狭湾遠泳などの体力づくり行事。当時はどうしてこんなことをするのだろうと不思議だったけれど、周りの友人が頑張っているのだから自分も頑張ろうと思える、貴重な体験でした。「後輩の皆さんも、学生時代の体験を無駄にすることなく大切にしてください。小さな達成感の積み重ねが自信となり、次のステップにつながります」

## 仕事も学生生活も
## フィールドを広げる気持ちが大事

**近畿日本ツーリストで企業や大学が開催するコンベンションの営業を担当する菊池紀彰さん。「エンドユーザーの反応を目の当たりにできる旅行業は、感謝されることが多い」と、やりがいを持って業務に臨んでいます。自身も海外留学にチャレンジするなど、広い世界を体験。実り多い学生生活が今の社会人生活につながっていると語ります。**

### 菊池 紀彰 さん

●きくち･のりあき
94年3月啓光学園高（現常翔啓光学園高）卒。99年3月上智大文学部ドイツ文学科卒。同年4月近畿日本ツーリスト入社。現在は関西イベント･コンベンション支店勤務。大阪府出身。36歳。